異文化感受性を再考する
――認知的複雑性と非対称性のもたらす異文化的状況に注目して――
Rethinking Intercultural Sensitivity: Cognitive Complexity and Intercultural Situation by Emerging Asymmetry in Context

○山本志都（東海大学）Shizu Yamamoto (Tokai University)

はじめに

異文化感受性とは、Bennett が 1986 年に発表した「異文化感受性発達モデル（Developmental Model of Intercultural Sensitivity:DMIS」というモデルにおける概念で、「文化的差異の主観的な経験（subjective experience of cultural difference）」に携わる。構成主義と認知的複雑性を理論的背景としている。DMIS は、個人の認知の構造が発達するに伴い、文化的差異の主観的な経験が変化する過程を表す。文化的差異がどのように見出され文化的境界が知覚される（または知覚されない）のか、何をどの程度の文化的差異（または類似性）として認知し、その経験をどう意味づけるのかなどが、6 つの段階にわたり示されている（Figure 1）。認知が最もシンプルな状態から、単純に二分化された状態、そしてより複雑な認知へと発達するにともなって、違いの位置付けや解釈が変化し、それに応じて、違いへの評価や態度も変容していく。

つまり、文化的な違いの周辺に関わる経験を組織化するときに、無限にある情報から何を選択的に知覚し（あるいは見過ごし）、それらをどのように解釈し、評価するのかは、個人がどのような認知的枠組みを活用しているかによって異なるということである。単純な枠組みは、馴染み深い既知の情報を中心にした認知と、自分にとって自然なあるいは都合のよい解釈を生み出しやすく、自文化中心的な態度へとつながる。より複雑で、洗練された認知的枠組みが発達していくことによって、同じ事柄を経験したとしても、その経験はより豊かで多義的で奥深くなっていく。

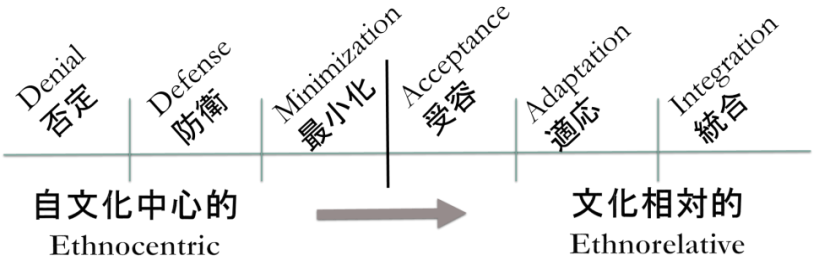

Figure 1. 異文化感受性発達モデル（DMIS）
注）Bennett (1986)を参考に山本が作成

このモデルは、異文化適応の文脈で取り上げられることが多く、異文化コミュニケーションのテキストなどにおいても、異文化適応に関連した章で紹介されることが多い。その際に、モデルの 6 つの段階が静的で固定化したものとして表現され、また直線的モデルとして理解されるような形で紹介されることが少なくはない。しかし、その解釈には偏りがあると言え、このモデルの理論から得られる示唆の範囲を極めて限定的にしてしまっている。そこで、本研究では、「認知的複雑性」と「葛藤」に焦点を当て、さらに、文化という集団的次元のみならず、「コンテクスト上にあらわれる非対称性がもたらす異文化的状況」に注目するこ

とによって、新たな観点から異文化感受性を再考し、その応用性を提示したい。

方法

本研究は、次の 3 つの側面から異文化感受性を再考する。まず、Bennett が 2011 年の「SIETAR Europa」ジャーナルの中で、1986 年の発表から 25 年の経つ DMIS について、その開発経緯や意図を 8 ページにわたり語ったインタビュー記事を概観する。次に、認知的複雑性理論に着目することによって、異文化感受性と DMIS を改めてどのように捉えることができるか検討する。葛藤についても関連づける。最後に、異文化感受性は文化という集団レベルで考えられるものではあるが、人びとが接触するときの文脈上にあらわれる非対称性を取り上げることによって、個人間の多様な立場の違いと異文化感受性とを結びつけて検討したい。

考察

DMIS の開発経緯からの再考　インタビューに答えて Bennett（2011）は、DMIS の理論構築に影響を与えた彼自身の生い立ちや、1960～70 年代の学生時代の出来事にも触れている。このインタビューからは、DMIS に当時どのような位置づけがあり、モデルの概念がどのような背景に基づき構築されたのかがわかる。Bennett によると、1980 年代半ばの異文化トレーニングでは、方法論がでたらめに適用され（e.g. 昼飯の後の眠気覚ましにシミュレーションを行う）、どんな手法やトピックをどのタイミングに配置すれば効果的であるかについての、教育学的な順序立てや、論理的な判断がなされていなかった。この問題に応えることが DMIS 開発の出発点であったと Bennett は述べている。モデルの各段階において、異文化の認知の仕方と、その段階に特長的な態度やコミュニケーション行動が詳細に描写されているのは、トレーナーが学習者の現状やニーズを把握し、学習目標を立てることに役立てるためであったと言える。Bennett は、「段階」とは名付けたものの、実際のところこれらは段階というよりは連続体上に現れる立場であり、異なる経験の組織化に印付けしているものであると述べている。しかしその高い説明力ゆえに、このわかりやすく便利な各段階の特徴という側面のみが強調され、モデルの理論的背景から切り離され、独り歩きをしたと推察できる。静的で直線的なモデルという見方をされるのはこの所以と考えられる。

認知的複雑性と葛藤からの再考　Bennett（2013）は、構成主義の立場から認知的複雑性について述べる中で、認知的な複雑さを増すことによって、人は出来事の認知をより細分化されたカテゴリーに組織化することができるとしており、文化的差異のカテゴリーがより複雑で洗練されるにつれ、認知はより異文化的な感度を増すと述べている。

認知的複雑性とは、あるものや人、出来事を認識するときに、どれくらい複雑なカテゴリーを使って認識することができるかに関わる理論である。カテゴリーの複雑化の過程から DMIS を簡略的に説明すると、カテゴリーが未分化、つまりカテゴリーがないと、現象を捉えることができず、見過ごして認識しない（Denial）。カテゴリーが単純に分化した状態では、二分法(善悪など)で単純にとらえ（Defense）、ステレオタイプ的認知が起こりやすい。カテゴリーが複雑に分化していると、同時に複数の次元を使って、複雑なものを複雑なままで認識することができる（Acceptance 以降の段階）。DMIS の段階が示す認知と合致することがわかる。このようにして見ると、DMIS はやはり 6 つの独立した段階で成るのではなく、あくまで連続体でしかなく、分化の進み具合をわかりやすく区切って目印づけしたのが段階であるとみる方が、本来であることがわかる。

さらに、この視点と「葛藤」を組み合わせて再考してみよう。差異を認知しないことで個人の主観的な現実世界に葛藤を生み出さない状態（Denial）、葛藤を認知しても自分の主観的現実をシンプルに維持するため防衛的になる状態（Defense）、差異をより一般化されたカテゴリーに組み込んで平穏を保つ状態（Minimization）などのように、自文化中心主義的段階は、個人が何らかの方略を用いて自身の初期状態として設定する世界観を守ろうとする姿を描いている。しかし、自分とは別の設定が成立するカテゴリーの存在を脅威としてでな

く認識する（Acceptance）と、そのカテゴリーの設定で葛藤を説明し、またその設定する現実世界のモードに入って考え、行動できることが葛藤を和らげ（Adaptation）、さらに、カテゴリー生成の主体者としての意識によって、複数のカテゴリーと共存する葛藤と向き合いながらも、コンテクストに応じて自身がコミットするカテゴリーを選択することができる（Integration）ということを描いていると解釈できる。すなわち、葛藤と出会い、葛藤に困惑し、葛藤に説明をつけようとし、葛藤を認め、葛藤を受け入れ、あるいは、葛藤が自分の一部ともなり、そして葛藤し続けながらもその中に自分の立ち位置を見出すという、葛藤が複雑さを増しながら洗練されていく過程として、見立てることが可能である。

非対称性のもたらす異文化的状況からの再考　文化の定義は集団レベルであり、異文化も集団的に理解されている。しかしこのことが知見の応用範囲を狭めているとも言える。仮に、コンテクスト上に「非対称性」のあらわれたときを、「異文化的状況」の発生としてとらえると、DMIS は現代の社会的なニーズにもっと対応できるのではないか。

家庭や職場、学校では、様々なコンテクスト上で多様な非対称性が現れ、共生のために何ができるかが課題となっている。たとえば、LGBT、認知症、発達障害、子育てカップル／シングルピアレント、医療的ケア児、外国につながりを持つ子どもたち等は、あるコンテクストに直面したとき浮き彫りになる可能性を持った、一つの立場である。カテゴリーとしても認識可能ではあるが、その立場にある人同士が集団として相互作用する必要は必ずしもなく、個別的存在であると同時に、共通した経験や困りごとに直面している。

非対称的な立場や関係が社会的に形成されることは言うまでもない。しかし、文化という言葉で表そうとすると、同じ立場の人同士がコミュニティ内で相互作用する中から生み出され継承されたということを連想させてしまう。非対称性は、たとえば、ある経験やある状態の保有者と非保有者、熟達者と非熟達者、趣味嗜好や興味関心の違いにまで広げることができる。そのような非対称性に出会ったときに、「異文化」そのものではないが「異文化的状況」であるとすることが、多くの場面で役立つ可能性がある。すなわち、日常で誰かと会話をしていて、ある特定のコンテクストに触れたとき、両者の間にしっくり来ない感じや、行き違い、違和感などがあると、何かを軸に、非対称性をもたらす境界があらわれたサインとして、「異文化的状況が発生した」と考えるということである。

DMIS で説明される認知的発達と経験の組織化の過程は、異文化だけでなく非対称性がもたらす異文化的状況にも適用できるという再考によって、理論の応用範囲を広げることができる。

まとめ

本研究では、DMIS を、①開発経緯、②認知的複雑性と葛藤、③非対称性のもたらす異文化的状況、という 3 つの側面で再考した。以下にまとめを述べる。

Bennett（2011）によると、何らかの違いの関わる出来事があったとき、私たちは自分自身の文化に多少の優越感と愛着とを持ち、若干ネガティブな反応をしてしまう傾向をなかなかぬぐい去れない。しかし、大事なことは、いかに素早くその経験をより洗練されたカテゴリーで解釈し直すかであると Bennett は言う。

たとえば、新入社員と古参の社員が仕事上で関わり合っているとき、何か違和感があるので遠ざける（Denial）や、相手が間違っていて腹立たしい（Defense）と感じる場面がお互いにあるとする。そのようなとき、異文化感受性が低く、つまり認知カテゴリーが未分化であったり、単純でしかない場合は、「これだから『ゆとり』は」や「だから『おじさん』はいやだ」というラベリングとしてのカテゴリー使用により、ステレオタイプ的な決めつけをするかもしれない。しかし、「非対称性による異文化的状況が発生しているのかもしれない」として、立場に関わるカテゴリーを複数同時に試すこともできる（Acceptance 以降）。たとえば、「新人／先輩」、「SNS 派／メール派」、「独身者／子持ち既婚者」、「昇進はまだ先／昇進のかかったタイミング」、「健康／通院中」など、設定を変えると別の現実感が立ち上がる。葛藤の生じているコンテクストに対し、適切なカテゴリーを得られれば最良ではあるが、た

とえそうでなくても、判断を留保して、複雑なものを複雑なまま捉えることの試みになる。このことは、複数のカテゴリーによる主観的現実を想定し（Acceptance）、ある立場の人にとっての現実感がどのような設定で構成されるリアリティで経験されているものなのかを想像し、相手の現実感をシミュレートする想像力（共感力）を持つ（Adaptation）という、異文化感受性の発達へとつながっていく。

DMIS は、異文化トレーニングのプログラム開発および実施における教育学的枠組みや方法論が未発達であった 1980 年代に、どのような内容をどんなタイミングで配置すれば異文化間能力の育成に有効であるかを指し示す目的で開発された。そのため、各段階の特徴が明快でわかりやすく示されており、そのことが結果として、静的で直線的なモデルという印象を強めたと考えられる。この研究では、認知的に複雑さを増すことと、葛藤と向き合うことを合わせて考えることによって、モデルのより連続的で動態的な面を示すことができた。また、集団レベルの文化ではなく、コンテクスト上にあらわれる非対称性が個人間の差異をもたらすときに、それを異文化的状況の発生として捉えることができることについて、DMIS がこの状態の説明にも役立つことを指摘することができた。

今後はさらに理論的な検討を重ねていきたい。状況論などでも取り上げられる「異文化性」は、非対称性のもたらす異文化的状況に近接した視点である。「異文化間協働の活性化の概念モデル（山本, 2011）」における「異文化性からの作用領域」について、山本は、コンテクスト上の流れに干渉するイレギュラーな要素（e.g. 下手さ）を契機とするセンスメーキング（Weick, 1995 遠田・西本訳 2001）による組織化や、価値的に非対称な背景による効果と関連づけて議論している。今後はこのような関連する議論とも合わせて、異文化感受性の論考を深めていきたい。

引用文献

Bennett, M. J. (1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*,*10*, 170-198.

Bennett, M. J. (2011). An Interview: How he created the DMIS. *SIETAR Europa Journal*, *March*, 2-9. Retrieved from https://www.sietareu.org/images/stories/newsletters/journal%20march%202011.pdf (July 26, 2018.)

Bennett, M. J. (2013). Intercultural Adaptation. In M. J. Bennett (Ed.), *Basic concepts of intercultural communication: Paradigms, principles, & practices*(2nd ed., pp. 83-103). Boston, MA: Intercultural Press.

Weick, K. E. (1995). *Sensemaking in organizations.* Thousand Oaks, CA: Sage.
（ワイク, K. E. 遠田雄志・西本直人（訳）（2001）センスメーキング　イン　オーガニゼーションズ　文眞堂

山本志都（2011）．異文化間協働におけるコミュニケーション――相互作用の学習体験化および組織と個人の影響の実証的研究―― ナカニシヤ出版